

帝キネ百々之助 映畫

原作並脚色者

監督者

龍岡半三郎

箕村源左衛門

主要役割

市川百々之助氏

小國嵐

比沙志氏

森今寛十郎氏

登瓦男氏

幹也氏

立花幹也氏

静香木八

耶氏

妻お浅

笛木の娘お美智

牛駒穂之助

小森新十郎

山下澄子嬢

尾玉氏

松村玉尾氏

森今幹也氏

『略筋省略』

市川百々之助氏が芦屋映畫を脱して本社南屬の下に製作した第一回作品である。小國比沙志氏の原作並脚色は確固たるテリーなどは持つて居ないが數奇な運命、弄ばされる熱血兒を努めて通俗的に日百々之助式に書き上げて居る。森本登良男氏の監督も百々之助氏を自由に動して居て好い。中にもラストの近くの獨立小屋に於る亂闘は殊によかつた。殺陣にからませて段々小屋を壊してゆく新手は面白く見た。それ丈最後の捕物が無駄な感がした。市川百々之助氏の牛三郎は活氣横溢だつたのは嬉しい。殺陣も立派であった。それに可成りの新手を鮮かに見せた。百々之助らしい演技、百々之助獨得の作品であらう。山下澄子嬢のお美智は單に相手役と云ふ丈で役の性格などもはつきりしない役なので活躍の餘地がなかつたが牛三郎の悲痛の叫びを聞いて小屋へ引返す邊りが演所で娘もお嬢の邊りは懸命に演じて居た。その他の人は駒穂の少い人ではあるが役相應に演じて居た。立花幹也氏の撮影は中々好い。

山本綠葉

興行價值——市川百々之助獨立第一回作品さも云ふべき作品たゞ全體に活氣がある。百々之助を好み観客には決して失望させない作品である

版事は断言出来る（七月十四日　浅草大勝館　大芦造劇場　神戸相生座　京都キネマ俱樂部）